

掘りやすくなった

「宝の山」

豊田 一秀



「幼児の教育」
(第50巻第1号) 1951年
創刊150周年号

「幼児の教育」誌と復刻版

『幼児の教育』誌が、幼児教育の世界にいる者にとって「宝の山」である事実は、いまさら言うまでもないことです。明治三十四年に『婦人と子ども』という誌名で発刊された本誌は、今日に至るまでの日本の幼児教育の歴史そのものと言っても過言ではないでしょう。たとえば、日本における幼稚園設立の経緯、当時の保育の様子や保育内容、教材全般について、F・フレibelの教育主張がどのように受け入れられ、どのように咀嚼^{そしやく}されていたのか、ま

た、日本全国への幼児教育の普及の様子など、戦前の本誌をめぐれば生きた証としての文献があふれています。さらに、今日、不朽の名作とされる数々の著作も最初は本誌に掲載されたものが多いのです。ご承知の方も多いとは思いますが、たとえば『育ての心』（倉橋惣三文庫③（上）・④（下）フレibel館）をはじめとする倉橋惣三の主要な著書も、最初の本誌に掲載されたものです。しかし、この月刊誌は、その歴史があまりに長いため全巻を完全な形で所蔵している施設はないと聞いています。

そのために、昭和五十四年から五十六年にかけて

『幼児の教育』誌の復刻版が三期に分けて、名著刊行会より出版されました。これは明治三十四年の創刊号から昭和二十八年年度発刊のものまで五十二年間分を復刻したもので、この偉業によって本誌は多くの人々、特に保育研究者にさまざまな情報を提供できるようになったのです。この復刻版の優れたところは、各号の表紙やカット、掲載された広告なども忠実に再現しているところです。このことにより、本の装丁史、保育教材の歴史、保育関係の出版物の歴史など、多方面の研究の基礎資料として利用することが可能となりました。また、この全集の最後、第五十二巻の後ろ部分と別冊には津守眞氏の「解題」をはじめ、年表や総目次などが載せられ、本誌を俯瞰する際の大きな助けとなっています。

『幼児の教育』誌の電子化の意義

このように、日本の保育のみならず、明治中期以

降の「日本」そのものを学ぶために大きな役割を担ってきた復刻版ですが、幾つかの限界もみられます。第一点は、出版数が三千部（第一期刊行分）であるために、どこの地域、学校にあってもすぐに手に取れるほど身近ではないということです（もちろん、このような出版物としては出版数が決して少ない方ではありません）。第二点は、復刻版が、創刊（明治三十四年）から昭和二十八年度までの五十二年間の間のものしかカバーされておらず、その後、今日まで既に五十五年という月日が経過してしまっただということ。昭和二十八年以降の本誌はそれ以前のものに比較して多く残っているように思いますが、それでもこの五十五年間の雑誌を一堂に目にするのは簡単ではないでしょう。

そのような問題が生じている中、今回、『幼児の教育』誌が発刊以来すべての号を電子化すると聞き、何と素晴らしい企画かと思わず快哉を叫んだ次

第です。この企画の完成にはもう少し時間がかかるというものの、電子化によって、復刻版の最後である昭和二十八年と今日が重なったばかりでなく、創刊号と今日が重なったと言っても過言ではないでしょう。さらに、利便性の面でも、誰もが図書館に赴くことなしにすべての雑誌を閲覧することが可能になったのです。

利便性の一例として、今日では保育界の重鎮である津守眞氏の本誌への執筆を調べようとした場合、復刻版によって昭和二十五年六月号よりであることがわかります。しかしそれ以降、すなわち昭和二十八年以降の著作は発刊済みの本誌を探すほかなかったのです。今回の電子化によって著作の検索が著しく容易になるはずです。

また、本誌に連載された文章（論文）が後に単行本として出版された例として、戦前の『育ての心』を挙げましたが、このような例はほかにも枚挙にい

とまがありません。たとえば、前述の津守眞氏の『保育者の地平』（ミネルヴァ書房一九九七）、本田和子氏の『子ども一〇〇年のエポック』（フレールベル館二〇〇〇）、海老沢敏氏の『むすんでひらいて考ルソーの夢』（岩波書店一九八六）、守永英子氏の『保育の中の小さな大切なこと』（フレールベル館二〇〇一）なども初出は本誌であり、単行本には見られない著者の筆致を本誌の中に見いだそうとするとき、この電子化は大きな力を発揮すると考えます。

「幼児の教育」誌と私

私事になりますが、私は昭和五十二年にお茶の水女子大学附属幼稚園に採用されました。思い返すまでもなく、私は保育に対して駆け出しの青二才でした。その未熟な私が、附属幼稚園の一員として『幼児の教育』の編集会議に参加するよう言われたのです。会議のメンバーは津守氏、本田氏、編者の皆川

恵美子氏でした。私は、最初の席で驚くような質問を受けました。津守氏より、この雑誌の感想と課題、今後の方向性について意見を求められたのです。質問にどのように答えたかは記憶に定かではありませんが、私の心に強く残った印象は、この未熟な自分を対等な者として扱おうとする、その姿勢でした。その後、たびたび編集会議に参加しましたが、経験の浅い者にも対等に接しようとする編集会議の姿勢に変わることはありませんでした。

この印象を基に、「対等」という言葉をキーワードとして『幼児の教育』誌を読み直すと、この雑誌の変わらぬ本質の一面を見ることができるようになります。それは、研究者と実践者の対等、幼稚園と家庭の対等、社会と母親の対等、そして、何よりも、子どもを人として対等な存在として尊重する姿勢です。

「研究者と実践者の対等」に関してですが、本誌の

長い歴史の中で、保育実践報告の部分は常に大切にされてきました。時代を追ってこれらの実践記録を読み進んでみると、大変に興味深い事実が気づきます。実践記録の一つ一つは事例であり、「理論」として長く世に残りにくいモノですが、時代の流れの中でとらえ直すと、その時代の幼児観、保育観というものが反映されていることに気づくのです。そして、その時どきの筆者が、その時代、時代に真剣に子どもに向き合った息遣いに私は感動を覚えます。

昭和二十六年一月号の、創刊五十周年記念の文章で、倉橋は「本誌の心にあるものは、回顧よりも展望である……」と熱く語っています。現実に向ければ、現代は子どもが子どもらしく生きにくい時代のように思います。この「宝の山」を掘り進むことによって将来へのより良い展望が開かれることを切に望む私です。

(玉川大学 教育学部／元幼稚園教諭・元園長)